

重複障害者の意思表出手段の獲得を目指した指導実践

○青柳リエ子 (山形県教育センター) 大江啓賢 (山形大学地域教育文化学部) 森谷留美子 (元山形大学大学院教育実践研究科)
 重複障害者 意思表出 学習習得状況把握表 (GSH)

【目的】

土谷 (2006) は障害が重複し重度である子どもは、コミュニケーションにおいては特に発信が困難となり、そのことが、他者に対して<受動的・依存的>とならざるを得ない状況をもたらすと述べている。よって、音声言語や身振りなどによる意思表出に困難を抱える、障害が重度で重複している児童・生徒 (以下、重複障害者) の意思表出手段の獲得が必要であると考えます。本指導実践では、重複障害者の意思が相手に伝わる方法を指導者が見つけ出し、その方法を本人に伝えることにより、重複障害者自身が意思の伝え方に気づくことができるようにすることを目的とした。

【方法】

1. 対象：養護学校中学部に在籍する重複障害者1名 (以下、対象生徒) とした。2. 実施期間：20XX年5～12月とし、5～7月に実態把握とプレ指導、8～12月に本指導を行った。指導は1回15分程度を基本とし、自立活動の授業の一環で行うこととした。3. 倫理的配慮：対象生徒の保護者に書面による説明を行い、同意書の提出をもって同意を得た。4. 実態把握：保護者及び前担任からの聞き取り、実践者による様子観察、学習習得状況把握表 (以下、GSH) の簡易版を用いて、対象生徒のコミュニケーションに関する学習習得マップを作成した。5. プレ指導：実態把握から得られた情報から、プレ指導を、色々な音楽を聞く、好みの曲を聞く、初めての曲を聞く、音楽を聞くか聞かないかを選ぶ、の順で構成し、4回実施した。6. 本指導：プレ指導の結果に基づき、1回の指導を①学習内容を確認する (音楽を聞くことを伝える)、②曲の最初の30秒を聞く、③曲を聞くかどうかを選ぶ、④終わりのあいさつ、で構成し、期間中に10回実施した。なお、③の判断として、『口を動かす』動きの出現を『音楽が聞きたいとき』とし、音楽を最初から聞くこととした。それ以外は、『今日は音楽を聞かないですね』と確認した上でこの活動を終了した。

【結果】

1. 実態把握：対象生徒の関係者からの聞き取りや様子観察から、主に次の3点が確認された。1点目は、音楽を好む傾向があること。2点目は、他者からの働きかけを受けて口を動かす様子が見られること。3点目は、働きかけから応答までの時間に幅があるということである。また、GSHの簡易版を用いて作成した学習習得マップ (図1) により、働きかけを快として受容することや、大人への積極性、期待反応の分化、視覚サインの初期理解などは達成されつつ

あり、音声単語の初期理解も途上にあることが示された。その一方で、選択や、Yes/Noによる初期要求表出は未達成であることが示された。2. プレ指導：プレ指導において、保護者により対象生徒の好みの曲であると評価された曲 (以下、曲Aとする) を聞いたときに、目線や口の動きといった応答行動が見られた。特に口の動きが活発であった。ほかの曲では、はっきりした応答行動は見られなかった。また、音を出さずに、音楽プレーヤーを視覚的に提示しただけでは、応答行動は見られなかった。3. 本指導：1～6回の指導では、『この曲 (曲A) を聞きたいときは口を動かしてください』という言葉かけに応じて口を動かす様子が見られた。しかし、回によって動かし方に違いが見られた。口角を上げる動きと口をもぐもぐする動きの両方が見られた回と、そのどちらかだけという回があった。7～10回の指導では、『この曲を聞きたいときは口を動かしてください』という言葉かけに対して最初は小さく舌を動かし、徐々に口を大きくもぐもぐする動きが見られた。この動きは4回の指導のいずれにおいても確認された。

【考察】

実態把握では、学習習得マップから初期要求表出を促す必要性が示され、意思表出手段の獲得を目指した指導を行うことの妥当性が示唆された。

プレ指導では、応答行動を引き出しやすいと考えられる好みの曲が見出された。また、音楽を聞きたいかどうかを選ぶためには実際に聞く必要があることが明らかとなった。このことから、実態把握の結果に基づくプレ指導の実施が、適切な本指導プラン作成につながることを推察された。

本指導では、曲Aを用いることで、『聞きたい』という意欲が引き出されたと考えられる。その状況で、口を動かすと好みの曲を聞くことができるという経験を重ねることにより、『口を動かせば、好きな曲を聞くことができる』という見通しをもてるようになったのではないかと考えられる。その結果、『聞きたい』意思を伝える手段として『舌を動かしてから口をもぐもぐする』という方法が定着してきたと考えられる。このことから、『聞きたい』という意思の伝え方に気づくことができるようにする指導として、この指導の有効性が推察された。

【謝辞】

本指導実践にご協力いただいた対象生徒とご家族、養護学校の先生方に深謝いたします。

【文献】

- 1) 小池敏英・三室秀雄・神山寛・佐藤正一・雲井未敏 (2014) 障害の重い子供のコミュニケーション指導—学習習得状況把握表 (GSH) の活用—。ジアース教育新社。
- 2) 鈴木由美子・藤田和弘 (1997) 表出手段に制限のある脳性まひ幼児の eye pointing を用いた選択行動の形成。特殊教育研究, 34 (4), 1-10.
- 3) 土谷良巳 (2006) 重症心身障害児・者とのコミュニケーション。発達障害研究, 28 (4), 238-247.

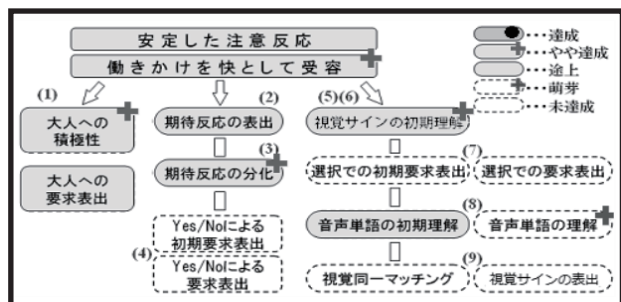


図1 対象生徒の学習習得マップ

(AOYAGI Rieko, OOE Hirokata, MORIYA Rumiko)